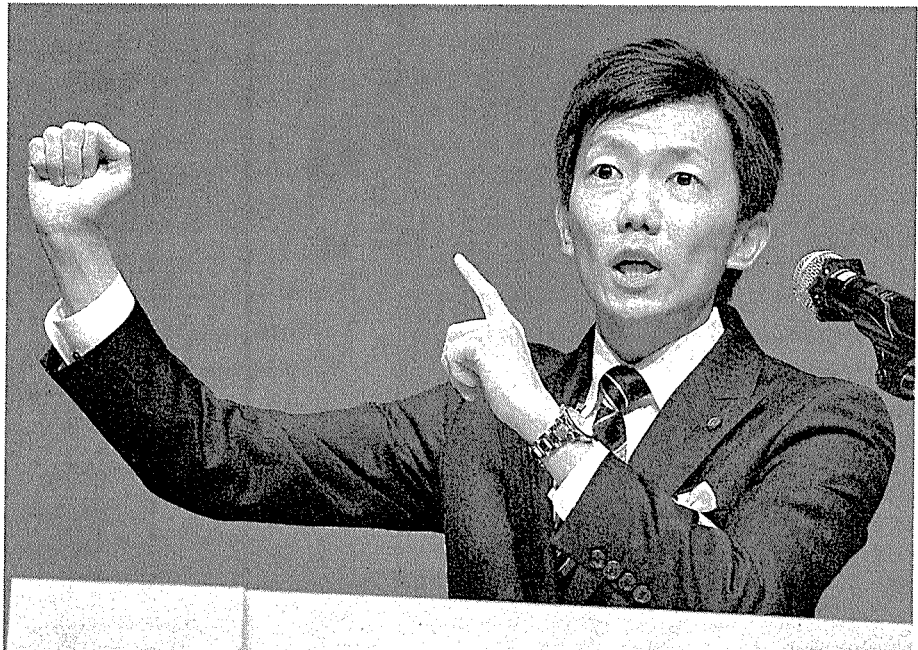


# 生活の根幹 守り抜く日本へ

「農業で徳のある国を目指す」

は だ だ い せん  
松下政経塾 波田大専さん (29)



無人のトラクターが田畑を耕し、空からはドローンが自動飛行で農薬を散布する。ドローマ「下町ロケット」でも話題となった無人農業ロボットは、衛星からの測位情報をもとに誤差数センチの精度で自動運転を可能にするものです。これが実現すれば、農業の生産性を飛躍的に向上させることができ、日本の農業が抱える人手不足の問題解決に繋がります。

日本はこうした技術を世界に広めることで、地球規模での農業の生産性向上に取り組んではどうでしょう。技術力を誇る日本が、最先端農業大国として世界の農業の発展と食料問題の解決に貢献する。そんな世界から尊敬される徳のある国を目指したい。これが、私からの提案です。

私は、昨年春まで6年間、地元北海道の農業団体に勤務しており、無人農業ロボットなどの最先端技術の普及を進める仕事をして

きました。新人時代に農業実習をした農家では、毎年種まきや収穫の繁忙期になると近所の人たちや兄弟が総出で作業を手伝いに来ていました。しかし、ここ数年でそうした人たちも年を重ねて体ももたなくなってしまう、やむを得ず派遣会社に求人依頼するもの、どこの農家からも求人者が殺到する状況で思うように人が集まりません。隣の農家は、人手不足で経営を維持することができなくなり、昨年農地を手放して離農してしまいました。このような光景を現場で数多く目にしてきました。

農林水産省によると、日本の農家の平均年齢は67歳。農業人口はこの15年で何と4割も減少しており、今後高齢化が進みます。農業現場では人手不足が一刻の猶予もない喫緊の課題となっているのです。

そこで、近年注目されているのが無人農業ロボットです。しかし、普及に向けた最大の課題は国の法整備が追いついていないことです。例えば、農薬散布のドローンは、自動飛行の機能が備わって

いるにもかかわらず、農水省のガイドラインによって自動飛行は禁止されています。さらに、ドローンの操縦者に加え、もう1人が補助員として常時飛行を監視することが義務づけられており、1台のドローンを飛ばすのに2人の人手を要するのが現状です。

農業の衰退は国力の衰退に繋がります。最先端技術の普及によって農業を守り抜くことは、私たちの命の源である食料の生産を守り抜くことであり、国民生活の根幹を支える最も重要な課題であると考えます。

「ルールが悪ければ、ルールを改める勇気を持って」  
これは行政改革の鬼と称された土光敏夫氏が残した言葉です。私は昨年職場に辞表を出し、政治の道志す決意を致しました。果たすべき使命は、農業における現代版の「土光改革」であります。規制改革を通じて最先端農業大国日本を実現し、そして世界から尊敬される徳のある国日本を目指し、身命を賭して使命に徹することをお誓い申し上げます。

## 第35回 土光杯全日本青年弁論大会

### テーマ 「私の100歳時代プロジェクト」

誰もが経験したことのない、100歳まで生きることが当たり前となる時代を迎えつつある日本。どうすれば個人の意識や組織のあり方、社会構造の変革を促せるか。第35回土光杯全日本青年弁論大会（フジサ

ンケイグループ主催、積水ハウス特別協賛）が12日、東京・大手町のサンケイプラザホールで開かれ、若者たちが熱弁をふるった。大会テーマは「私の100歳時代プロジェクト」。論文審査を勝ち抜いた弁士

11人のうち、最優秀賞の土光杯、優秀賞の産経新聞社杯、フジテレビ杯、ニッポン放送杯、岡山出身の土光敏夫氏にちなんで設けられた特別賞の岡山賞に輝いた5人の要旨を紹介する。



土光杯全日本青年弁論大会

行政改革に大きな足跡を残した故土光敏夫臨時行政調査会長の「行革の実行には若い力が必要」との呼びかけに応じてフジサンケイグループが昭和60（1985）年に創設。テーマはその後、拡大され、日本の将来を担う若者の主張の場として毎年開催される。